

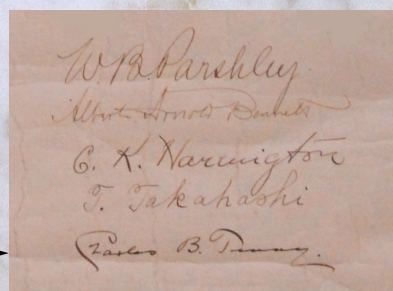
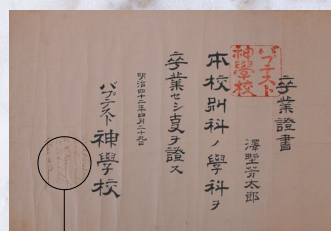
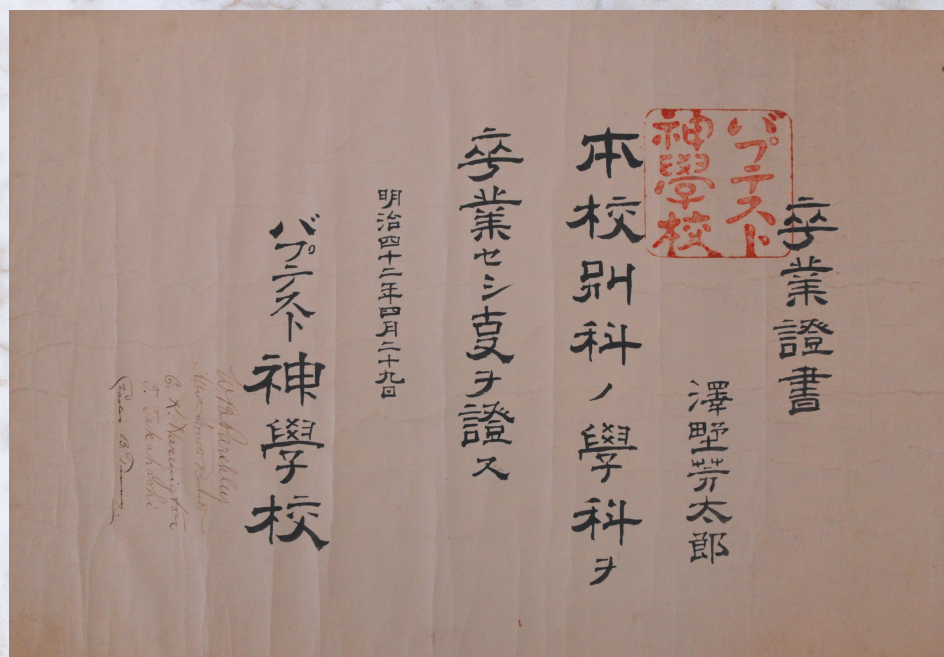
関東学院 学院史資料室 ニュース・レター

No.12

2009.2

目次

学院史資料室写真集11	1
関東学院史料展 展示史料の紹介 (第4回・第5回)	2
関東学院旧教職員からの寄稿	22
学院史資料の紹介	23
資料・情報提供のお願い	24
編集後記	24



◀サイン部分拡大
上から
パーシュレー
ベンネット
ハリントン
高橋楯雄
テンネー

学院史資料室写真集11・バプテスト神学校卒業證書

1909 (明治42) 年に横浜バプテスト神学校を卒業した澤野芳太郎の卒業證書。卒業證書には、校長のパーシュレーや創設者ベンネットのサインがある。(サイン部分拡大参照)

横浜バプテスト神学校は、1906 (明治39) 年に本科と別科に分かれ、翌年には予科を置いた。

澤野は卒業後、東北地方への農村伝道に使命を持ち、仙台、塩釜、高田、盛岡、遠野の教会を中心に伝道活動を行う。長男の良一は、東京学院神学部を卒業し、関東学院で教えた。良一の弟正幸と正幸の子息寛は関東学院で神学教育を受け牧師になった。大学図書館所蔵。350×480 (mm)。

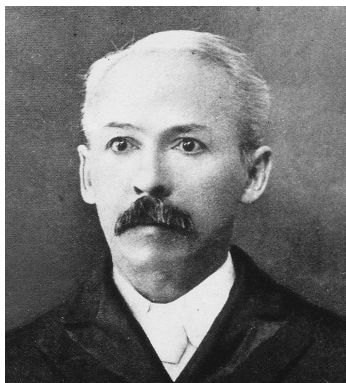
(参考資料：日本キリスト教歴史大事典)

関東学院史料展（第4回・第5回）展示史料の紹介

「第4回 関東学院の源流を探る —横浜バプテスト神学校と東京中学院—」

2007年10月2日から10月24日まで開催 於：関東学院大学 Foresight21エントランスロビー

◆展示写真



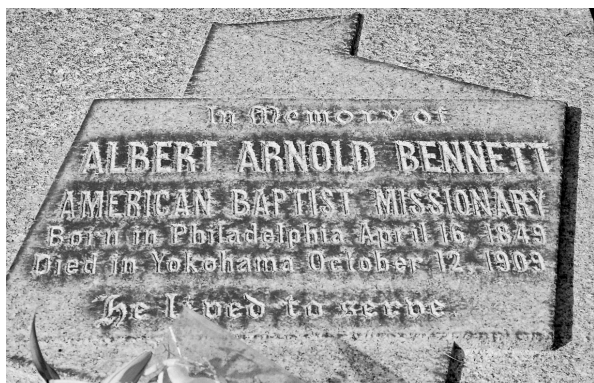
アルバート・アーノルド・ベンネット (1849~1909)
Albert Arnold Bennett

関東学院の源流の横浜バプテスト神学校の設立者・初代校長・教授。

ベンネットは1879（明治12）年宣教師として来日し、1884（明治17）年横浜バプテスト神学校を設立し、25年間学校の発展に貢献した。

ベンネットは教育・伝道・社会奉仕と多方面にわたり活動し、その奉仕の生涯は多くの人たちに深い宗教的影響を与え、讃美歌にも歌われている。(1・2・3)*

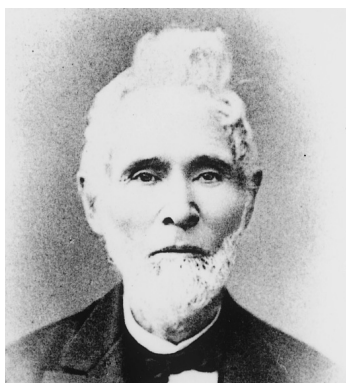
*21頁参考資料一覧の番号。以下同様。



横浜外国人墓地にあるベンネットの墓碑銘

In Memory of
ALBERT ARNOLD BENNETT
AMERICAN BAPTIST MISSIONARY
Born in Philadelphia, April 16, 1849
Died in Yokohama, October 12, 1909
He lived to serve

この墓碑銘の“*He lived to serve*”（彼は仕えるために生きた）という言葉はベンネットの奉仕の生涯そのものを表現したものである。(2・3)



ネイサン・ブラウン (1807~1886)
Nathan Brown

日本におけるバプテスト初代宣教師。

ブラウンはその生涯の前半、ビルマとインドのアッサムで23年間宣教活動に従事し、3人の愛児を次々と失いながら、1847（弘化4）年、アッサム語に翻訳した新約聖書を出版した。その後、病のため1855（安政2）年にアメリカへ帰る。帰国後は奴隷解放活動に参加した。

1873（明治6）年2月、宣教師として来日。このとき65歳であった。聖書の翻訳に使命を持ち、翌年には新約聖書マルコ福音書の翻訳を完了し、「聖書之抄書（せいしょのぬきがき）」という讃美歌集も出版した。そして、1879（明治12）年に日本語最初の新約聖書全訳を平仮名表記による、わかりやすい文で翻訳出版した。

ブラウンはベンネットが進めていた神学校創設を側面から援助し、ブラウンの自宅でベンネットが提案した神学校創設を受け入れ、神学校のために土地と建物が購入できるように、米国バプテスト・ミッションに依頼した。

(2・4・5・6)



(全体)

ブラウンの墓碑銘

(部分)

ブラウンは日本で13年間宣教師として活動し、1886（明治19）年1月1日に横浜で召天した。ベンネットが告別式の司式をし、横浜外国人墓地に葬られた。葬儀にはヘボン博士も参列し、ブラウンが大学卒業の時に作った詩“Missionary（宣教師の召し）”を朗読した。墓碑にはブラウンの遺言により“God bless the Japanese（神よ日本人を祝福したまえ）”と記されている。また、ブラウンが改訂中だった新約聖書「ヘブル人への手紙」と讚美歌を開いた様子が墓碑に刻まれている。ブラウンは老齢にも拘わらず手が痺れてペンが持てなくなるまでの長時間、改訂作業を行った。ベンネットはブラウンの遺志を継ぎ新約聖書の改訂を川勝鉄弥と共に引継ぎ刊行し、讚美歌の改訂版も刊行した。（1・2・4・6・7・8・9）



「日本バプテスト発祥之地」碑

碑は横浜元町から山手へ上る代官坂の途中にある。この碑の上方が、横浜外国人居留地山手75番。山手75番地は1873（明治6）年2月7日、バプテスト派の宣教師のブラウン夫妻とゴープル夫妻が来日し、宣教活動の拠点とした地であり、碑には「明治六年二月七日ネーサンブラウン博士来朝此ノ地ニ布教本據ヲ置ク」と書かれてある。関東学院の源流である横浜バプテスト神学校は創設2年後の1886（明治19）年に山手64番地から山手75番地に移転した。また同地には、横浜第一浸礼教会（現在の日本バプテスト横浜教会）もあった。（15）



チャールズ・ヘンリー・デイ・フィッシャー（1848～1920）
Charles Henry Day Fisher

草創期の横浜バプテスト神学校教授。1883（明治16）年3月、来日。1884（明治17）年に横浜バプテスト神学校が開校した時の最初の教師はベンネットとポートとフィッシャーの3名であった。フィッシャーは「神学」の授業を担当した。授業は日本語で行うので、来日間もないフィッシャーにとっては授業の準備が大変であったが、神学教育の重要性と学生の授業に臨む熱心さに励まされ喜びをもって教えた。宣教師として水戸での伝道中に、水戸中学校から英語教師の依頼があり、クレメントを斡旋した。また、クレメントが東京中学院の学院長になった時には、その働きを助けた。フィッシャーは、日本人を愛し、そのために全生涯を捧げ、今は横浜山手外国人墓地に眠っている。（4・5・12）



チャールズ・ケンドール・ハリントン (1858~1920)
Charles Kendall Harrington

横浜バプテスト神学校草創期の貢献者。

1886(明治19)年12月、来日。翌年から横浜バプテスト神学校で旧約学の授業を担当した。草創期の横浜バプテスト神学校の基礎を初代校長ベンネットと共に築いた。横浜バプテスト神学校の初期の三大恩人として、「産みの母ベンネット」、「建設の父デーリング」、「学的充実に貢献したハリントン」と称された。

ハリントンは、信州で伝道活動をし、大町と松本に教会を設立した。伝道活動の時には、足袋と下駄を履き、箸を使うなど日本の生活様式に溶け込んでいた。平素質素な生活をし、節約したものを貧しい人々のために用いた。

また、聖書改訳委員として「マタイによる福音書」の翻訳を担当し、1917(大正6)年に改訳新約聖書を完成させた功績は大きい。(2・4・5・10・11)



ジョン・リンカーン・デーリング (1858~1916)
John Lincoln Dearing

横浜バプテスト神学校第2代目校長。

1889(明治22)年に宣教師として来日。1894(明治27)年にベンネットから校長を引継ぎ、1908(明治41)年までの14年間、2代目校長として横浜バプテスト神学校の発展に尽くした。

デーリングは行政的才能があり、ベンネット達が基礎を築いた横浜バプテスト神学校を発展させた。教育面では予科、本科、別科の課程を設け、教授陣にパーシュレー、テンネー、卒業生の高橋楯雄を招聘した。また、図書の寄贈を募り図書室を充実したり、神学生の実習の場として伝道所を開設したりした。施設面では1894年に山手75番に講堂と寄宿舎を建て施設を充実した。

1908(明治40)年、宣教地区の責任者に任命され校長を辞任した後、1911(明治44)年には英語学校と働く人々のための寄宿舎「愛友館」の事業を開始した。(4・5・10・12)



ウィルバー・ブラウン・パーシュレー (1859~1930)
Wilbur Brown Parshley

横浜バプテスト神学校第3代校長。

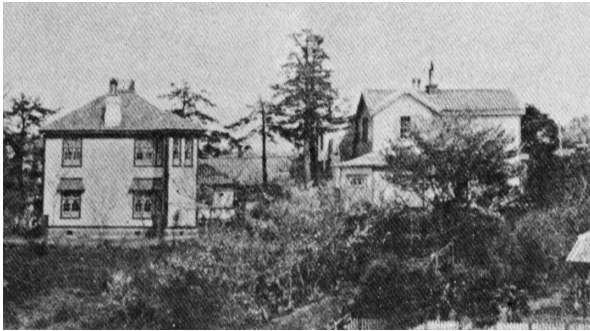
1890(明治23)年9月、宣教師として妻と共に来日。根室で開拓伝道をしていた妻の叔母にあたるカーペンター夫人を助け伝道を開始、その足跡は、道内はもちろん、国後、択捉にも及んだ。

1894(明治27)年、横浜バプテスト神学校校長デーリングにより、同校の教授に招聘され、旧約学を担当。後に教会史を教える。1908(明治41)年、校長に就任した。

1910年に横浜バプテスト神学校と福岡バプテスト神学校が合同し、日本バプテスト神学校(東京小石川表町)となった。この合同によって日本の神学校15校中3番目に生徒数の多い学校となった。パーシュレーは日本バプテスト神学校成立後も引き続き校長をつとめた。

神学校の夏季休暇中は、根室でカーペンター夫人を助け伝道を行った。

1912(明治45)年6月、休暇を得て一時帰国。日本に戻る予定であったが、健康を害したため来日をあきらめざるを得なかった。(4・5・6)



横浜バプテスト神学校校舎

左が学生寮、右が校舎、右下が横浜浸礼教会。

1884（明治17）年10月6日、横浜バプテスト神学校を横浜山手64番地に開設した。米国バプテスト・ミッション本部に土地の購入と校舎建設のための財政的援助を申請したが、本部は神学校より宣教を主に考えていたため理解を得られず、資金不足の中で出発した。そのためたびたび教場を移転しなければならなかったが、1886（明治19）年には横浜山手75番地に定着した。そして、神学校設立10年目の1894（明治27）年に校舎等が完成し充実した。同じ年、校長はベンネットからデーリングに代わった。

ベンネットの熱意で始められ、維持されてきた神学校が、やっと本部の支援を取り付け、学校経営が本格化した。

（2・5）



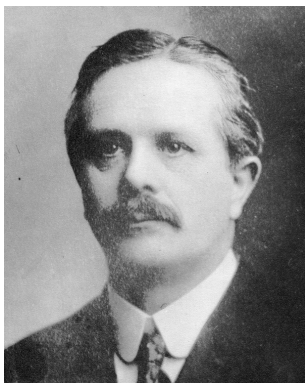
横浜バプテスト神学校の教師と学生

1894（明治27）年秋撮影。

横浜バプテスト神学校創設10年を迎えたこの年の10月に新校舎が落成した。校長はベンネットからデーリングに代わった。

教師は前列左3人目から順にタフト（教会史）、デーリング校長、星野光多（修辞学）。後列左5人目から順にパーシュレー（旧約学）、ベンネット（聖書釈義、説教）。

生徒の中には、前列右から2人目に渡部元（後、関東学院理事長、四谷浸礼教会牧師）、後列右から2人目に高橋楯雄（後、日本バプテスト神学校、西南学院神学部教授）がいる。（5・6・16）



アーネスト・ウィルソン・クレメント（1860～1941）
Ernest Wilson Clement

東京学院設立者。

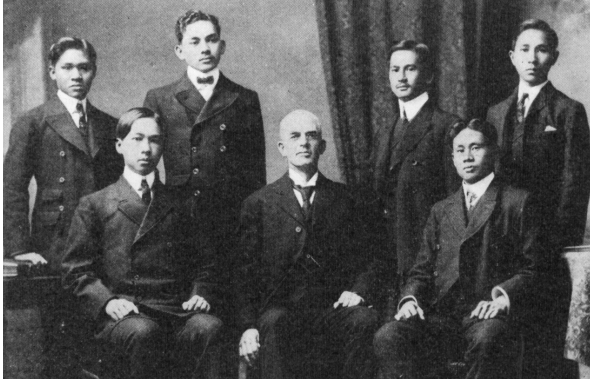
1887（明治20）年に来日し、水戸中学校（校長：渡瀬寅次郎）の英語教師を4年間つとめた。

1890（明治23）年12月の宣教師会議で、基礎教育・普通教育のための学校を組織することを決定し、その責任をクレメントが担うことになった。学校設立準備のため1891（明治24）年に帰国、その後、1895（明治28）年に再来日した。この年、東京築地居留地42、43番地（現在の中央区明石町。中央区立明石小学校があるところ。）に東京中学院を設立した。水戸で親交を深めた渡瀬寅次郎を学院長として迎え、クレメントは教頭として、実際の経営にあたった。

1899（明治32）年、私立学校令により設立願を提出し、このときに東京学院と校名を改めた。また所在地を築地から牛込左内町に移した。

1903（明治36）年、東京学院長に就任。クレメントの教育方針は少数精鋭主義で、人格教育を重視することであったが、大規模学校のほうが社会的評価も高く、東京学院内でも拡大方針の支持者が増えたため、1910（明治43）年にクレメントは院長を辞して帰国した。

1897年の台風で校舎兼寄宿舎の屋根が飛ばされた時、クレメントは夜もほとんど眠らず、片手に傘、片手にランタンを持ち、親身に学生の世話をした。後の関東学院長柳生直行は、「これこそまさにわが関東学院の建学の精神を象徴する」として、このエピソードを語っている。（4・5・13）



ヘンリー・タッピング (1857~1942) (前列中央)
Henry Topping

東京学院教授。

1895 (明治28) 年、タッピングは妻のジェネヴィーヴと共に来日。ただちに東京中学院に赴任した。

1899 (明治32) 年、私立学校令公布により、東京中学院を東京学院として設立申請し、クレメントと共に設立者となる。

タッピングはクレメントの不在時には東京学院院長代理をつとめ活躍したが、1907 (明治40) 年、東北伝道をしてきたアキシングの突然の病気のため、代わりに宣教師として盛岡に赴任することになった。東北各地の宣教活動に従事し、盛岡高等農林学校で英語を教えた。ジェネヴィーヴは盛岡幼稚園を創設し、また県立盛岡中学校で英語を教えた。宮澤賢治はタッピング夫妻のバイブルクラスに出席して、英語と聖書を学んでおり、「岩手公園」と題してタッピング一家の詩を書いている。タッピング夫妻の息子ウィラードは関東学院の理事・教師として戦後復興に貢献した。六浦キャンパスの「タッピング・ポンド」はタッピング一家を記念し命名された。(4・5・14)



サミュエル・ホワイト・ダンカン (1838~1898)
Samuel White Duncan

東京学院の英語名の起源となった人。

1899 (明治32) 年10月、東京中学院は牛込左内町に移転し、名称を東京学院と改めた。東京学院の英語名はダンカンに記念して“Duncan Baptist Academy”とした。

ダンカンがアメリカン・バプテスト・ミッショナリー・ユニオン海外担当主事として、高等教育に大きな関心を持ち、日本におけるバプテスト宣教事業にとってなくてはならない施設とするため、東京学院の整備・拡充を支援する計画を立てた。

東京学院の整備・拡充のために、アメリカの教会関係から寄付があり、特にダンカンの急逝後、その姉妹 (ハリス夫人) から多額の寄付があった。

東京学院の校訓は、ダンカンの座右の銘であったローマ人への手紙12章11節「職務に怠らず心を熱くして主に事へよ」だった。(4・5)



ハリー・B・ベニンホフ (1874~1949)
Harry Baxter Benninghoff

東京学院の教授・学院長。

来日以前、夫人と共に教育宣教師としてミャンマーのヤンゴン・バプテスト大学に派遣された。大学では化学と代数を教え、キリスト教教育を若者に提供することに情熱を持っていた。

1907 (明治40) 年来日、東京学院教授に着任。1910 (明治43) 年にはクレメントに代わって東京学院の3代目学院長に就任。ベニンホフが学院長になり東京学院は活性化され、学生数も増え、教授陣も充実した。

ベニンホフは交流があった早稲田大学の安部磯雄教授の紹介で大隈重信と会い、大隈の要請によってキリスト教主義の学生寮「友愛学舎」を創設した。東京学院長を務めながら早稲田大学の学生寮の活動に関わっていたが、激務のために体調を崩し、1912年に学院長を辞任した。(4・5・6)



東京学院校舎

1899（明治32）年、新築した東京学院校舎（牛込区左内町）。東京学院はもともと東京中学院として発足した。東京中学院は1895（明治28）年、東京築地居留地に設立された。校舎は一時的な仮校舎で、設立2年後の1897（明治30）年9月、台風のため校舎の屋根が吹き飛ばされ、一時隣地の他教派の神学校を借りて授業をするような状態であった。東京中学院の良き理解者であった米国バプテスト伝道協会主事ダンカン博士は校地と施設を整備・拡充するための支援計画を立てていた。東京中学院は1899（明治32）年に牛込区左内町に移転し、東京学院と校名を改めた。学校の敷地購入や、建物の費用の出資者は、アメリカのバプテスト諸教会とダンカン博士の妹のロバート・ハリス夫人だった。校地は市谷左内坂の上、高台の校地は3段に分かれ、上段に校舎及び宣教師館、中段に運動場と寄宿舍、下段にテニスコートと炊事場等があった。（4・5）



千葉勇五郎（1870～1943）

東京学院と関東学院の学院長。中学時代に仙台でバプテスト派のジョーンズ宣教師のバイブルクラスに出席しキリスト教と出会う。1893（明治26）年、東京英和学校英語師範科を卒業、日本バプテストからの最初の留学生として渡米し神学を学んだ。1898（明治31）年、帰国。その後、尚綱女学校、東京学院教頭に就任した。1907（明治40）年、福岡バプテスト神学校が発足、校長に就任。1910（明治43）、横浜バプテスト神学校と福岡バプテスト神学校が合併し、日本バプテスト神学校となり教頭に就任。そして、1919（大正8）年、東京学院に戻り、学院長に就任。1927（昭和2）年、東京学院が関東学院と合流し、関東学院の副学院長、1932（昭和7）年には学院長に就任した。自分を必要としているところ、使命を認識したところにはどこでも出かけ献身し尽した千葉は生涯の最後に、「奉仕は乏しく、恩寵は深し」と告白した。神の大いなる愛の前には自分の献身は尚足りない、と謙虚に自分の生涯の総括をしたのであった。キリスト教関係の著書と翻訳書が出版されている。（4）



ダニエル・クレアレンス・ホルトム（1884～1962）
Daniel Clarence Holtom

日本バプテスト神学校・東京学院・関東学院の教授。1910（明治43）年、宣教師として来日。1914（大正3）年から東京学院教授、1915（大正4）年から日本バプテスト神学校教授を兼ねる。東京学院と関東学院が合併した後も関東学院教授として、語学、神学を担当。1935（昭和10）年、関東学院神学部長に就任。1936（昭和11）年、関東学院神学部が青山学院と合併してから青山学院神学部教授、神学部長となった。1941（昭和16）年、太平洋戦争開戦の年に帰国。ホルトムは日本の精神的要因ならびに直面している諸問題を明確にするために神道の研究を進めた。その研究成果の神道に関する論文・著書を1922（大正11）年以降次々と出した。「日本と天皇と神道」は日本語に翻訳され出版された。（4・6）



日本バプテスト神学校卒業式（第4回）

1914（大正3）年6月3日、第4回卒業式を神学校講堂で行った。卒業生は横山時雄（本科）、足達信三郎（別科）、白石清（別科）。

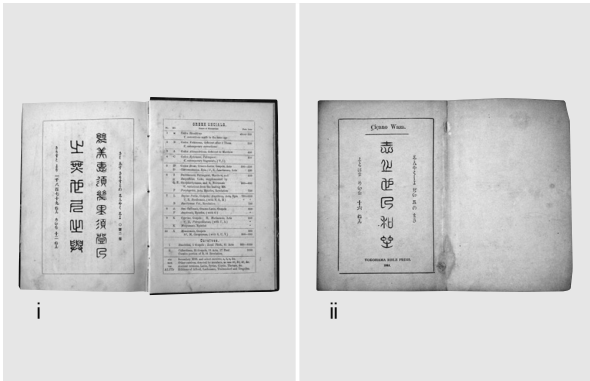
当時のキリスト教指導者である内村鑑三、小崎弘道が式に出席し、記念講演を行った。

写真の前列左からテンネー、内村鑑三、白石清、足達信三郎、横山時雄、小崎弘道、校長のハリントン、横浜バプテスト神学校卒業生で教授の高橋楯雄。第2列左から佐藤喜太郎、千葉勇五郎、ウイリングハム、ドージャー、後藤六雄、ウワーン、中島力三郎、アキスリング、フィリップス。第3列左から橋本正三、中居京、四方郡郎、石丸際、植山皓、江上熊雄、曾根三治。第4列左から澤野良一、牧野正彦、熊野清樹、加茂久司、増田乙吉、照屋寛範、石橋球三郎。

在学生の中には、後の関東学院で要職をつとめた澤野良一、関東学院大学神学部長の中居京がいる。（17・18）

◆展示資料

●ネイサン・ブラウンの翻訳聖書、讃美歌

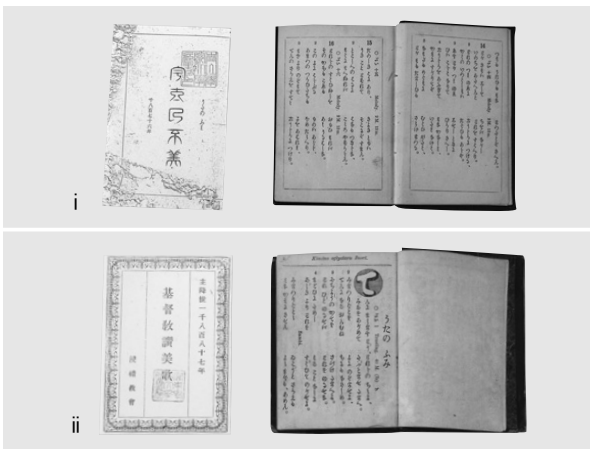


- i 『志無也久志與』1879年刊（しんやくしょ・新約書）
- ii 『志士也乃和坐』1883年刊（ししゃのわざ・使者の業）

1879（明治12）年、ブラウンは日本で最初に新約聖書を翻訳し、刊行した。ブラウンはその後、引き続き聖書の改訳に取り組み、改訂版を刊行し続けた。『志士也乃和坐』は1878（明治11）年に翻訳したが、1885（明治18）年に改訳して、子息ウィリアム・ブラウンの印刷所「横浜バイブル・プレス」から発行した。（19）

大学図書館所蔵。

- ・志無也久志與…235×160（mm）、志士也乃和坐…180×125（mm）



- i 『宇多之不美』1876年刊
- ii 『基督教讚美歌』1887年刊

ブラウンは聖書の翻訳と共に讃美歌の翻訳も行い、『聖書之抄書（せいしよのぬきがき）』（1875年）、『宇太登不止（うたとふし）』（1876年）、『宇多之不美（うたのふみ）』の3歌集を刊行した。

ペンネットはブラウンの遺業である讃美歌の編集を引継ぎ1887（明治20）年に『基督教讚美歌』を刊行した。（1・6）大学図書館所蔵。

- ・宇多之不美…160×115（mm）、基督教讚美歌…140×105（mm）

●デーリング関係著作



『組織神學一班』1902年初版、1907年2版

デーリングは横浜バプテスト神学校で「組織神学」の授業を担当。
神学校での講義の集大成として出版した著作。
大学図書館所蔵。

・ 190×135 (mm), 231 + 9 頁

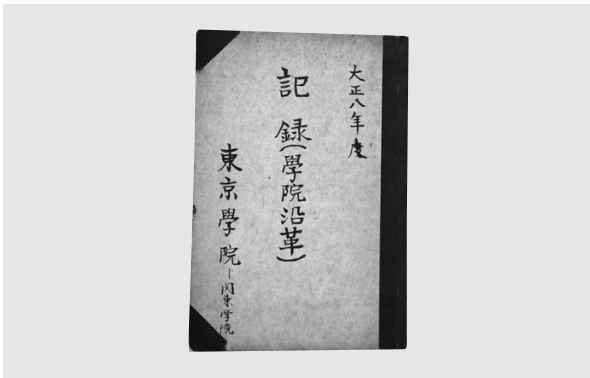


『デーリング博士傳』高橋楯雄編著 1917年刊

高橋楯雄は1897（明治30）年、デーリングが校長の時に神学校を卒業。
1917（大正6）年1月22日に日本バプテスト神学校で行われたデーリングの追悼会でデーリングの伝記の刊行が決まり、高橋が編集することになった。出版のために多くの関係者から寄付があった。
大学図書館所蔵。

・ 185×125 (mm), 124頁

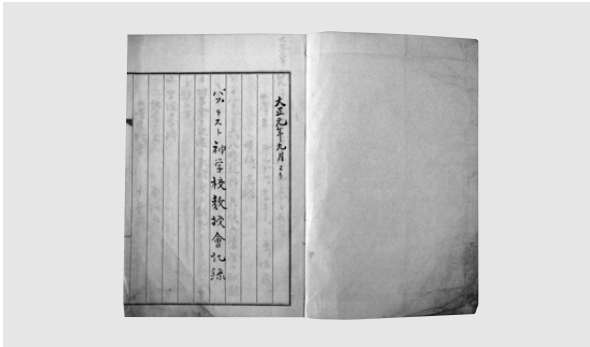
（「バプテスト神学校卒業證書」は表紙頁参照）



大正八年度 記録（學院沿革） 東京学院一関東学院

「東京学院沿革」として、東京学院の特質および設立の趣意が冒頭に記されている。
東京中学院の成立から、東京学院が財団法人関東学院の組織に入るまでの沿革が記録されている。

・ 230×170 (mm)



バプテスト神学校教授会記録（大正元年九月より）

1912（大正元）年9月から1916（大正5）年7月までの日本バプテスト神学校教授会議事録。

・ 225×160（mm）



TOPPING MEMORIAL POND

2005（平成17）年2月まで、六浦キャンパスの経済学館の前にタッピング・ポンドがあり、銘板はそこに付いていたもの。

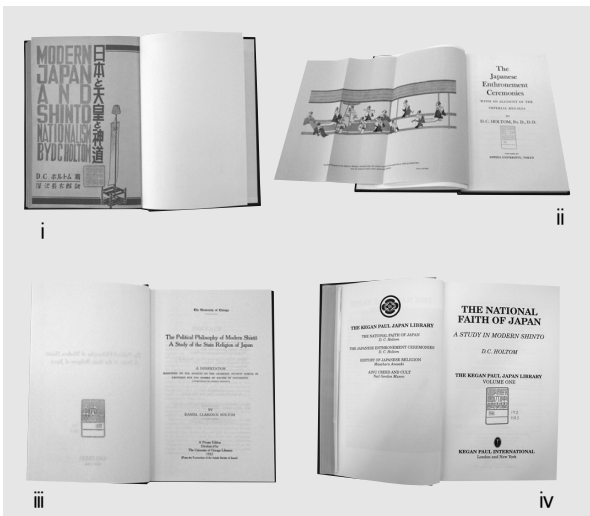
タッピング・ポンドはタッピング一家の日本での奉仕活動を永久に記念するために名づけられた。ヘンリーは東京中学院（後、東京学院）教授、夫人のジェネヴィエヴは岩手県最初の幼稚園である盛岡幼稚園を設立。令嬢のヘレンはYWCA活動に従事。令息ウイラードは戦後の関東学院復興に貢献した。

関東学院の短期大学で教えたウイラード夫人からの寄付金を中心に、アメリカのバプテスト教会の方々の献金、卒業生有志の寄付で建てられた。

現在の6号館前にあるタッピング・ポンドは2代目となり、タッピング一家が登場する宮沢賢治の詩『岩手公園』の碑を新たに設置した。

・ 銘板…140×700（mm）

●ホルトムの著書



ホルトムの神道研究や日本の文化に関する著書は広く読まれ、復刻版が出ている。

いずれも大学図書館所蔵。

- ・ i …180×125（mm），300頁、
- ii …260×175（mm），129頁、
- iii …225×150（mm），325頁、
- iv …220×145（mm），329頁

- i 『日本と天皇と神道』 深沢長太郎訳 道遥書院1950
（Modern Japan and Shinto Nationalism, 1943の翻訳）
- ii The Japanese Enthronement Ceremonies, 1928rep. 1972
- iii The Political Philosophy of Modern Shinto, 1922rep. 1984
- iv The National Faith of Japan, 1938rep. 1995

●関連年表

- | | | | |
|-------|--|-------|--|
| 1873年 | アメリカ・バプテスト海外伝道協会からブラウン宣教師夫妻来日（2・7）。 | 1898年 | 東京中院第1回卒業式挙行（3・）。 |
| 1879年 | ブラウン、日本で最初に新約聖書を翻訳し、『志無也久世無志与』（しんやくぜんしよ・新約全書）を刊行（8・1）。ベンネット来日（12・7）。 | 1899年 | 私立学校令公布により、東京学院中学部設立願を東京府知事に申請。クレメント、タッピングを設立者とする（9・14）。東京牛込左内町29番に移転し、校名を東京学院と改称（10・28）。 |
| 1880年 | ベンネット、日本人伝道者育成のために説教指導を行う。 | 1900年 | 東京学院校舎落成。 |
| 1881年 | ベンネット、聖書の講義と説教を教え、神学校設立まで継続する。 | 1903年 | 渡瀬寅次郎に代わってクレメントが東京学院長に就任（3・31）。 |
| 1883年 | フィッシャー来日（3・17）。 | 1905年 | 東京学院に専門学校令による高等科を設置（4・19）。 |
| 1884年 | ブラウン宅で開かれた京浜の宣教師会でベンネットの提案により神学校設立が決議される（3・7）。横浜山手64番に横浜バプテスト神学校設立（10・6）。校長はベンネット。 | 1907年 | ベニンホフ来日（6・）。 |
| 1886年 | ブラウン召天（1・1）、ベンネットが葬儀の司式（1・4）。ハリントン来日（12・13）。年末、横浜バプテスト神学校は山手75番に移転。 | 1908年 | 横浜バプテスト神学校、デーリングに代わりパーシュレーが校長に就任（9・）。 |
| 1887年 | ハリントンが神学校教授となり、旧約学を担当。クレメント来日（10・）。 | 1909年 | 横浜バプテスト神学校創立25周年祝賀会（10・11）。ベンネット召天（10・12）。 |
| 1888年 | 横浜バプテスト神学校の修業年限を4ヵ年とし、進級、卒業を制度化する。 | 1910年 | クレメントに代わってベニンホフが東京学院長に就任（4・）。ホルトム来日（7・22）。横浜バプテスト神学校と福岡バプテスト神学校が合同し、日本バプテスト神学校として東京小石川表町109番に開設。校長はパーシュレー、教頭は千葉勇五郎（10・12）。 |
| 1889年 | デーリング来日（11・5）。 | 1912年 | ベニンホフに代わってグレースットが東京学院長に就任。 |
| 1892年 | 横浜バプテスト神学校第1回卒業式挙行。世良田盛次郎が卒業（4）。 | 1917年 | 東京学院中等部を廃止（3・31）。 |
| 1894年 | ベンネットに代わってデーリングが校長に就任（9・）。横浜バプテスト神学校の校舎が落成、献堂式を挙行（10・22）。パーシュレー、教授に就任（10・）。 | 1918年 | 日本バプテスト神学校は北部バプテスト教会のみの神学校となる（6・）。グレースットに代わってテンネーが東京学院長に就任（12・）。 |
| 1895年 | 東京築地居留地42番に東京中院設立。学院長は渡瀬寅次郎、教頭はクレメント（9・10）。 | 1919年 | 私立中学関東学院設立（1・27）。設立者テンネー、院長坂田祐。 |
| 1897年 | 東京中院校舎が台風のため破壊、他教派の神学校校舎を借りて授業（9）。 | 1927年 | 財団法人関東学院を組織、東京学院はその組織に入り、関東学院高等学部、神学部になる（4・1）。 |

「第5回 関東学院の源流を探る 中学関東学院と財団法人関東学院 —テンネーと坂田祐—」

2008年9月16日から10月15日まで開催 於：関東学院大学 Foresight21 (F-703)

◆色紙



校訓「人になれ 奉仕せよ」

1919（大正8）年4月9日、中学関東学院の第1回入学式が行われた。学院長坂田祐は式辞において、「人になれ奉仕せよ」と、キリスト教主義によって建てられた関東学院の建学の精神を具体的に表現した。そしてこれが校訓となり、現在に至っている。

坂田は校訓の意味を「キリストの教訓をもって人たるの人格をみがき、キリストの愛の精神をもって奉仕することである。」と自著『恩寵の生涯』で述べている。

校訓の色紙は、この他に「人になれ 奉仕せよ その土台はイエス・キリスト也」と横書きしたもの（複写）が、坂田記念館に保管されている。

・272×243 (mm)

◆ 展示写真

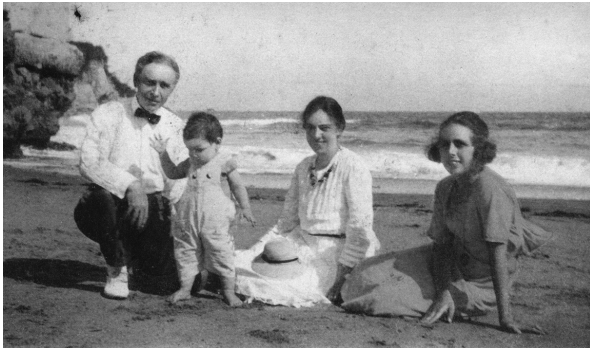


テンネー
Charles Buckley Tenny

関東学院初代学院長。

1900（明治33）年宣教師として来日。神戸、京都で伝道し、1908（明治41）年横浜バプテスト神学校教授、1913（大正2）年日本バプテスト神学校校長に就任。1917（大正6）年東京学院学院長として東京学院の中学部を廃校にし、1919（大正8）年横浜に中学関東学院を創立し、日本人の学校の指導者は日本人であるとの信念から坂田祐を学院長に任命した。

1927（昭和2）年には東京学院高等部、神学部と中学関東学院を統合し財団法人関東学院を設立し、日本人理事の依頼で学院長に就任。学院発展の基礎を築いた。（12）



テンネーと家族

1913（大正2）年、テンネーは日本バプテスト神学校長に就任し、翌年に岡山組合教会宣教師J・H・ペティーの娘エリザベス・ペティーと再婚した。先妻のグレースとエリザベスはマウント・ホリオーク・カレッジで同窓の間柄であり、共に大学のキリスト教女子青年会の指導者として活躍した。

テンネーは高等商業部でファイリング・システムの授業を担当し、エリザベスは英会話と西欧のマナーを教えた。

写真は1922（大正11）年に撮ったもので、左からテンネー、次男フランシス、エリザベス、長女ルースである。（4・5・20）



テンネーと関東学院セツルメント

関東学院のセツルメント活動は学院の建学の精神である「奉仕」を社会事業部の学生が実習するために1928（昭和3）年から行った。神学部・高等商業部の教師と学生もこの活動に参加した。1931年には神奈川の浦島町に、全国からの募金により会館を建設し、労働問題の講座や職業相談と斡旋、児童に対する学業の補習、日曜学校、裁縫、キャンプ、運動会等の活動を行った。

テンネーは学生時代に貧民街で奉仕をした経験もあり、社会事業部の設立とその活動はテンネーの夢の実現でもあった。

写真前列右からセツルメントの指導者渡部一高教授、テンネー学院長、澤野良一教授である。学生は社会事業部の学生でセツルメント活動の実習に参加した。（4・21・22）

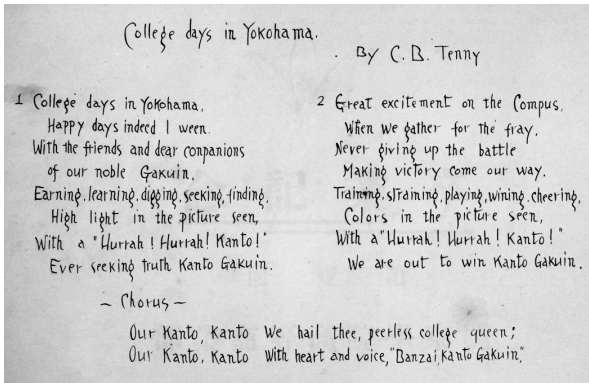


テンネーと学生

学院の校風は自由闊達で、先生方の住居は学院に近く、学生はよく先生方の家庭を訪問するなど家族的雰囲気があった。先生方も学生の訪問を歓迎し、ホームメイドのクッキーとミルクティー等をご馳走した。

テンネーも学生をよく招待して、会食の時を持った。テンネー夫人のエリザベスも学院で英会話とマナーを教えていた。学生は夫人に他家へ招待されたときのエチケットを教えられ、茶菓をよく振舞われた。

写っている子どもはテンネーの次男フランシス（1920年生まれ）である。（4・22）



COLLEGE DAYS IN YOKOHAMA
 関東学院カレッジソング

テンネーは繊細な芸術家の素質を持っており、オルガンを演奏し、横浜バプテスト神学校の初代校長ベンネットの葬儀の際、オルガンで奏楽を行った。また、ロングフェロー、ワーズワース、ブラウニングなどの詩を愛しテンネー自身も詩をつくった。

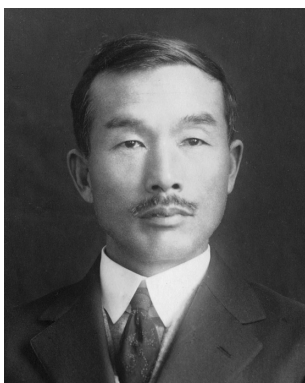
カレッジソングはテンネーの作詞・作曲で1933（昭和8）年12月の『The Kanto Olive』に発表されている。これは、学生生活を楽しく歌い上げたもので、学院の自由な気風が活き活きと表現されている。（4・20）



横浜外国人墓地のテンネー夫人と令息ボールの墓

テンネー夫人グレースは教会奉仕や公立中学で英語教師、病気の人を見舞ったり、率先して奉仕活動を行ってきた。1910（明治43）年9月27日、出産の際に天に召された。生まれたばかりの令息ボールも亡くなった。

テンネーは彼自身の注文で墓石をつくり、墓石にテンネー自身の名前も刻んだ。また、ギリシャ語で「このようにして、わたしたちはいつまでも主と共にいることになります。」（第1テサロニケ4：17）と刻み、やがて主のみもとで親子で再会する希望を記している。（20・23）



坂田 祐

中学関東学院初代学院長。

坂田祐は1903（明治36）年陸軍士官学校の馬術教官の時、四谷バプテスト教会の会員となった。1904（明治37）年東京学院に入学したが、まもなく日露戦争に従軍した。1907（明治40）年東京学院中等科4年に編入し、1909（明治42）年3月に卒業、9月に第一高等学校に入学した。在学中に内村鑑三の聖書研究会に入会し、同研究会のメンバー7名で白雨会を組織した。1912年7月東京帝国大学文科大学哲学科宗教学専攻に入学し、1915（大正4）年37歳で大学を卒業。直ちに東京学院の教師となった。

テンネーは中学関東学院設立（1919年）に際して、学校の方針として「日本の学校とすること」とし、学院長に坂田を推薦し学院の経営を任せた。

坂田はキリストの精神を建学の精神とし、これを具体的に表現するために『人になれ奉仕せよ』の言葉を校訓とした。1927（昭和2）年に財団法人関東学院となり、坂田は高等学部長と中学部長を務めた。（4・24）



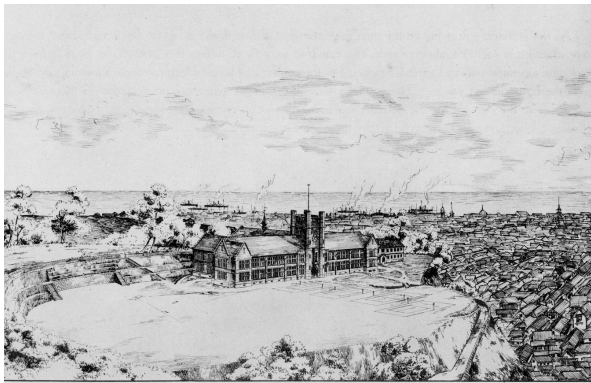
有吉忠一（1873～1947）

神奈川などの知事を経て朝鮮総督府政務総監。
神奈川県知事時代の1917（大正6）年に中学校建設のための土地を探していたテンネーと坂田を霞ヶ丘に案内し、商業地である横浜のために中学校のみでなく高等程度の商業学校の設置を勧め、1918（大正7）年に同地を払い下げた。1919（大正8）年1月27日に横浜開港記念館で行われた中学関東学院の開学披露会でも「商業界に立たんとする人に人道的理想又その理想に達する道を教えてくだされば何よりも喜ばしい事である」と述べた。（12・20・25）



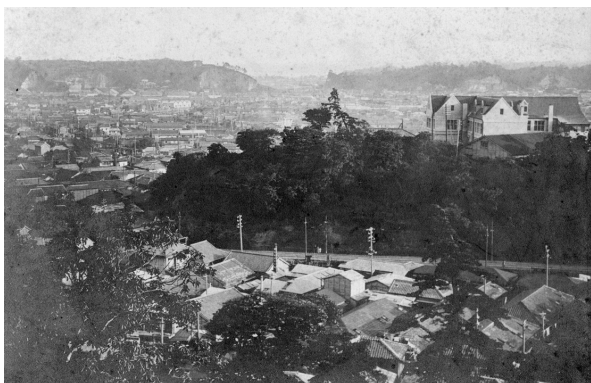
最初の校舎での礼拝

中学関東学院は1919（大正8）年4月に開校し、入学者は146名で、1年生4クラスであった。
校舎は木造の2階建てで各階2教室ずつあり、講堂はなく、礼拝（朝礼）は毎朝7時50分から校舎の前の校庭で行ったが、雨の日は校舎の中で教室毎に行った。
雨天時の礼拝は、オルガンの奏楽で、4教室の生徒が同時に同じ讃美歌を歌った。そして、教室毎に教師が同一の日課を朗読し、祈りを捧げた。
1920（大正9）年4月に鉄筋コンクリート2階建ての校舎が竣工し、それまで使っていた木造の校舎は生徒の寄宿舎となった。（20）



関東学院校舎の完成予想図

建設計画では、初期のエリザベス調の建築様式で、中央の塔を中心に左右に2階建ての校舎があり、中央の塔に続く部分には講堂の建設が予定されていた。
建物は鉄筋コンクリート構造で強化され、スレート葺きの屋根、鉄鋼製のサッシなどを備え、耐火性に優れ、当時としては、最新の建設構造と設備を持つ校舎の建設が予定されていた。（26）



関東大震災直前の関東学院と周辺地域

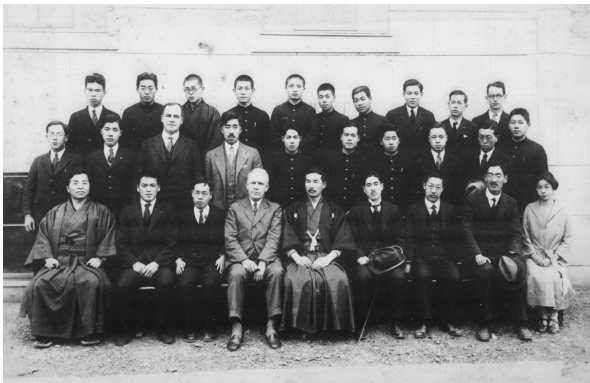
テンネーは1917（大正6）年有吉知事の斡旋で「兵隊山」（現・三春台校地）が払い下げられると、直ちにアメリカへ帰国して資金調達に奔走した。
アメリカのバプテスト・ミッションからの援助により、震災前には普通教室の他に美術、音楽、博物、地理等の特別教室、理科実験室をも備えた本格的な校舎が建てられた。その他に雨天体操場、木造校舎も逐次建設され、創立5年にして第一次建設計画が完成した。
「かくして校舎は漸次建設せられ、荒れ廢れた昔の兵隊山は朝夕讃美の聲きこゆる學園となった」と当時の様子が『関東学院創立満廿年紀念』（1939年11月発行）に記載されている。（20・27）



震災の被害にあった校舎

開校5年目の1923（大正12）年に中学校校舎として完成したが、9月1日に起こった関東大震災で、震災にも崩壊しないと折り紙をつけられていた鉄筋コンクリート建ての美しい校舎が一瞬にして崩壊し、3名の教職員が崩壊した校舎の下敷きになり圧死した。

校舎、寄宿舍等の全施設を失い、10月15日から神奈川の中丸にある捜真女学校の校舎を午後から借りて授業を再開した。復旧工事も迅速に行われ、翌年に仮校舎が完成し、2月29日から最高学年の5年生の授業を仮校舎で行うようになった。（5）



関東学院英語学校第3回卒業式（1928年）

1924（昭和4）年4月に関東学院英語学校（夜間授業）を設立し、開校式を行った（生徒は約130名）。坂田祐（前列左から5人目）が校長、大下繁喜（前列左から2人目）が主事に就任。

生徒は商社関係者が多く、年々生徒も増え、横浜ではYMCA 英語学校とともに高い評価を得た。

アメリカ人宣教師や英語教師による授業のほかに、放課後、英語会や祈祷会を行い、テンネー学院長（前列左から4人目）も時々出席し生徒を激励した。また、英語劇の上演や遠足も行い生徒たちは楽しく学ぶことができた。（28）



中学部本校舎前での中学卒業式写真（第7回）

関東大震災によって校舎が破壊し、第1回から第6回までの卒業写真は仮校舎等で撮影していたが、1929（昭和4）年4月に鉄筋コンクリート建ての中学部本校舎が竣工し、翌年3月の第7回の卒業写真は本校舎前で撮影することができた。

関東大震災の被害復興のため、テンネーは坂田祐を伴い1924（大正13）年5月に帰国した。関東学院の復興だけでなく日本の諸教会の復興のために募金運動を行った。坂田は「この復興のためにテンネー先生は全力を捧げられた。お陰をもって、学院は復興することができた。」とテンネーに深い感謝の意をあらわしている。（5・12・20）



関東学院の正門

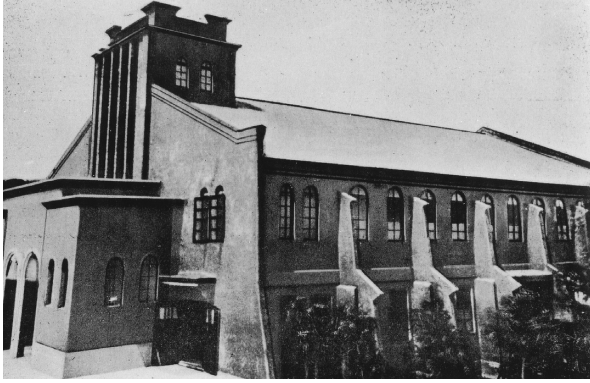
1929（昭和4）年に県道に面して新しい門が完成した（現三春台校地正門）。

テンネーはNEW GATE AND ROADWAY（新しい門とこれからの道）と題し、学院の建学の精神と教育理念を示す一文を記した。

「(略) 本当の学問とは他者のためにあるもの、人々を祝福するためのものなのです。私たちが大学に入学するのは、自分に必要なものを得るためだけではありません。世の中に広く奉仕する準備を整えるためなのです。(略)」

学院で学んだ者は、「奉仕されるのではなく奉仕する。そして他者のために人生を捧げる」人物となるよう示した。

（4）



テンネー記念大講堂

召天したテンネー学院長を記念し、講堂建設の募金が1936（昭和11）年9月から行われた。

日米関係の悪化によりアメリカからの募金の見込みがないことや、日中戦争などで建築資材が払底したために、鉄筋コンクリート造から木造へ、また、塔の部分を省略するなど大幅な建築設計の変更を行い、1938（昭和13）年6月に建設に取り掛かった。

1939（昭和14）年3月、2000人収容可能な講堂として竣工し、11月18日にテンネー記念大講堂で落成式と関東学院創立満20年記念式が行われた。設計の変更があったものの、「当時横浜一の大講堂で極めて立派なものであった」（『関東学院小史』1954年）と記録されている。

1945（昭和20）年5月29日の横浜大空襲で焼失した。（20）

◆展示資料



テンネー夫妻のアルバム

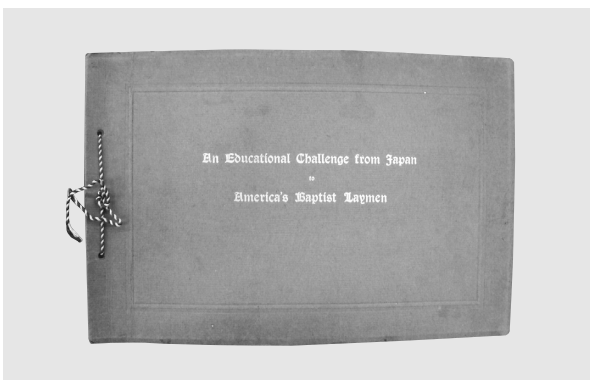
テンネーの愛妻グレースは1910（明治43）年9月に召天した。その後、1914（大正3）年にテンネーは宣教師の令嬢エリザベス・ベティーと再婚した。

この時、テンネーは東京学院理事長と日本バプテスト神学校長を兼ね多忙な日々を送っていたが、再び心からの理解者・協力者を得ることが出来た。

このアルバムに「天寧新御夫婦」とあるが、テンネーは日本文字の印章に「天寧」を使用した。このアルバムには新夫妻のアメリカに帰国する船上やテンネーの故郷のヒルトンの農園での楽しい新家庭が写し出されている。（4・12）

佐々木敏郎氏所蔵

・184×275（mm）



AN EDUCATIONAL CHALLENGE FROM JAPAN TO AMERICA'S BAPTIST LAYMEN

中学関東学院が設立される前年の1918（大正7）年、学院の設立の経過と、学院の構想や施設の全容について、援助してくれたアメリカのバプテスト教会の教会員に送った報告用のパンフレット。

テンネー宛に、中学関東学院に期待するという内容の有吉忠一神奈川県知事のメッセージも寄せられている。

坂田記念館所蔵

・159×239（mm）

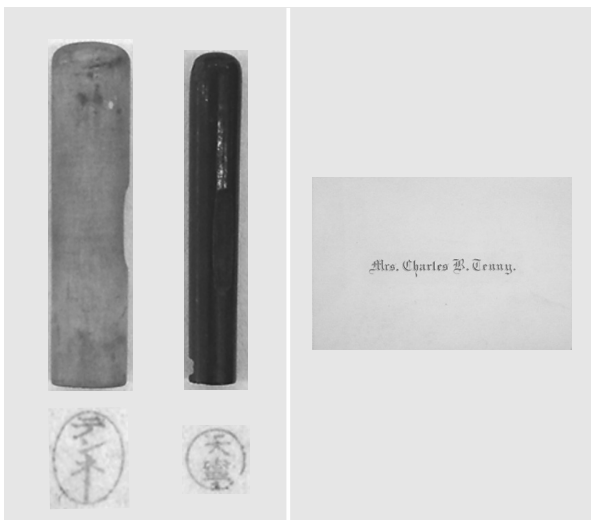


テンネー記念大講堂設計図繪葉書

テンネー学院長の学院の設立に心血を注がれた功績を記念して「テンネー記念講堂」を建設することにした。記念館は正面入り口の上にホールの高さのほぼ2倍の高さの尖塔が聳える堂々たる建物が計画された。

建設のため1936（昭和11）年から募金活動を始め、1937年9月に国内での募金予定額は達成したが、日米関係が悪化し、アメリカでの募金が見込めず、計画を大幅に変更した。（20）

・141×91（mm）

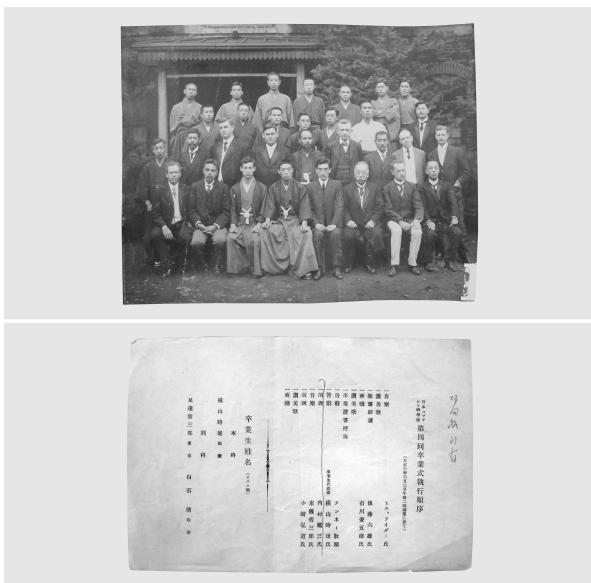


テンネーの印章とテンネー夫人の名刺

テンネー（Tenny）は英語読みだと「テニー」であるが、日本の呼称では「テンネー」とし、漢字では「天寧」を当てた。印章も、「テンネー」と「天寧」を所持していた。（5・12）

印章は共に中学校高等学校所蔵、名刺は坂田記念館所蔵

・テンネー印…13×9×61（mm）、天寧印…8×8×60（mm）、名刺…57×84（mm）



日本バプテスト神学校第4回卒業式 記念写真と式次第

1908（明治41）年、テンネーは横浜バプテスト神学校教授に就任した。1910（明治43）年、横浜バプテスト神学校と福岡バプテスト神学校が合併して東京小石川に日本バプテスト神学校が成立した。テンネーは引き続き教授となった。1913（大正2）年6月3日、第4回卒業式を神学校講堂で行い、本科の横山時雄、別科の足達信三郎と白石清が卒業した。

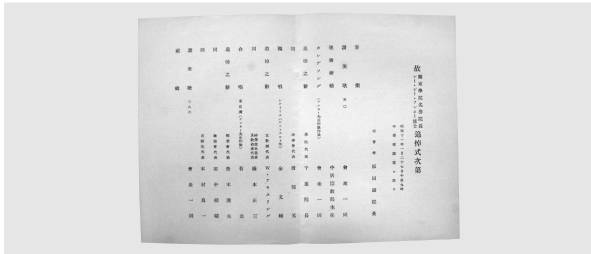
式には、当時のキリスト教の指導者である内村鑑三、小崎弘道も出席し、記念講演を行った。テンネーは教頭として告辞を述べている。

写真は前列左からテンネー、内村鑑三、卒業生の白石清、足達信三郎、横山時雄、小崎弘道、ハリントン校長、横浜バプテスト神学校卒業生で教授の高橋楯雄。

在学生の中には、後に関東学院で要職を務めた澤野良一（最後列左端）、中居京（前から3列目左から2人目）がいる。（12）

式次第は坂田記念館所蔵

・記念写真…190×242（mm）、式次第…160×236（mm）



テンネーの召天を報じた『関東学院高等時報』と
テンネー追悼式次第

テンネーは病気のため1932（昭和7）年学院長を辞任し、帰国した。関東学院はテンネーの功績を称え名誉学院長の称号を贈った。

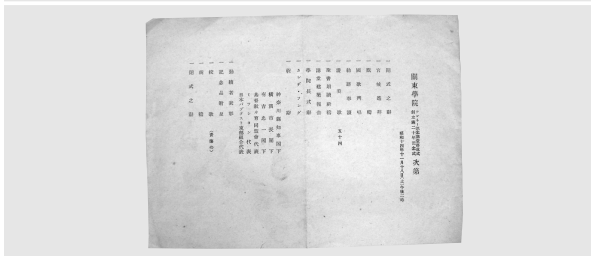
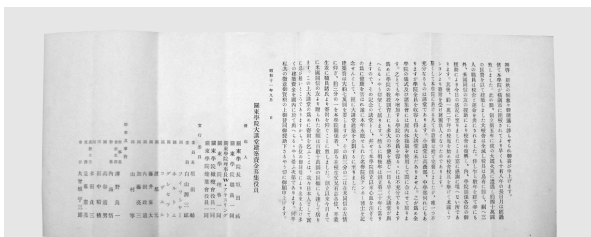
テンネーは静養のかいもなく1936（昭和11）年1月11日に召天した。関東学院は1月27日の創立記念日に追悼式を行った。

追悼式ではテンネーが作詞・作曲した「カレッジソング」と作詞した「東京湾」が歌われた。

テンネーは生前、カレッジソングの楽譜を学生に配布して、自らオルガンを弾いて歌唱指導をした。この歌は関東学院全体で愛され、今なお歌い継がれている。(27)

式次第は坂田記念館所蔵

- ・ 関東学院高等時報…394×270 (mm)、式次第…181×258 (mm)



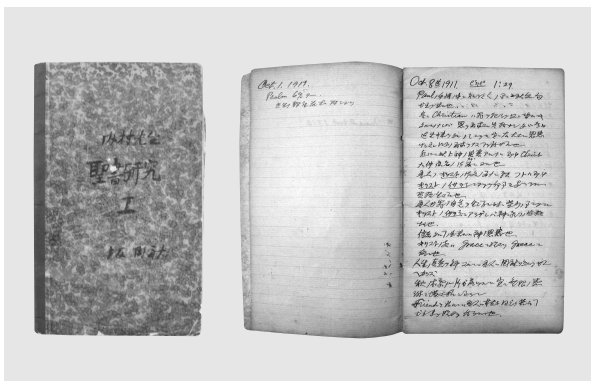
「テンネー記念講堂建築資金募金趣意書」と
「テンネー記念講堂落成式次第」

坂田祐はテンネーの逝去について「本学院創設以来心血を注ぎその為の健康を害はれ遂に本年永眠せられた」とその功績に深く感謝を捧げている。

1936（昭和11）年9月、テンネーを記念して、大講堂の建設を企画した。学院関係者の募金により、大講堂は1939（昭和14）年に落成した。

落成式は1939年11月18日に学院創立満20周年記念式を兼ねて行われた。(29・30)

- ・ 建築資金募金趣意書…198×510 (mm)、式次第…160×218 (mm)



内村鑑三聖書講義ノート

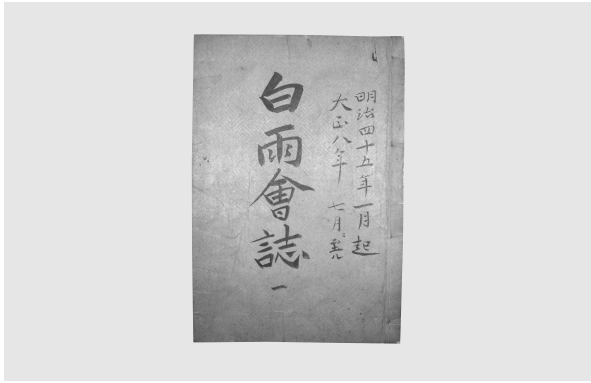
1911（明治44）年10月1日、坂田祐は内村鑑三の聖書研究会に参加することが許された。

坂田の著書『恩寵の生涯』に次のように記している。

「内村先生の弟子となって、先生から直接聖書の講義をきいて約8年間（横浜に来るまで）は、私の生涯において、信仰的に、靈的に最も恵まれた時であった。（中略）日曜日の聖書講義は大てい1時間半、ある時は2時間に及んだ。実に緊張した時間であった。一言もきき洩らすまいとつとめた。私は毎回その大要を筆記した。そのノートは約10冊あり今なお保存している。」(31)

坂田記念館所蔵

- ・ 202×125 (mm)



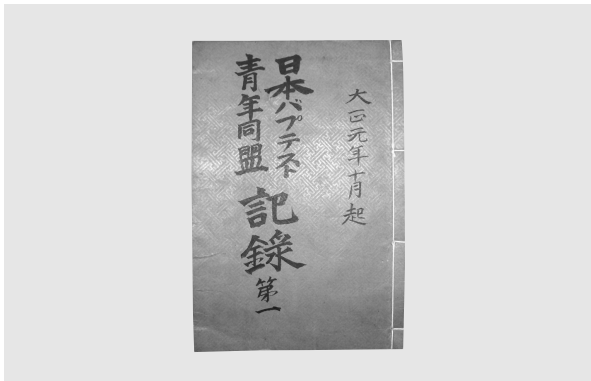
白雨会誌

「白雨会^{はくろうかい}」は内村鑑三の呼びかけで、南原繁、坂田祐等が発起人として、1912（明治45）年1月30日に坂田宅で発会式が行われた。坂田祐は南原繁と幹事を務めた。白雨会の名称は詩篇65篇10節「白雨（むらさめ）のごとくに恩恵が下る」による。

会誌は1911年12月23日から1932（昭和7）年までの20余年渡る聖書研究、信仰生活談、祈り、会食、家族的な交流が記録されている。南原繁は白雨会について「われわれは一つのファミリーのようになりました。」と言っている。白雨会は信仰ばかりでなく、家庭や生活を含めた信仰共同体として存在していた。(31)

坂田記念館

・ 231×158 (mm)



日本バプテス青年同盟記録

日本バプテス青年同盟はバプテス教会の青年組織で坂田祐が会長を務めていた。

1912（大正元）年11月7日付で他の教派に比べて教育機関が充実していない現状を改善するために、敷地の狭い東京学院を横浜郊外に移転して1万坪以上の土地に400名の学生を収容する教育機関とするよう意見書をミッションと東京学院当局に提出した。

1919（大正8）年に中学関東学院、1927（昭和2）年に財団法人関東学院が設立され意見書の内容が実現した。(5) 大学図書館所蔵

・ 231×158 (mm)



卒業論文『預言者耶利米亞』

東京帝国大学哲学科宗教学専攻の卒業論文。

坂田祐は1912（明治45）年東京帝国大学文科大学に入学、哲学科宗教学を専攻した。

卒業論文は旧約の預言者エレミヤ（耶利米亞）を採り上げ、1915（大正4）年4月に提出された。

論文主査の石橋智信専任講師は卒論の判定書の下書きに、「大変正確でクリアで、そして全く全体を概観できる叙述である」とこの論文を高く評価した。小川圭治関東学院元学院長も、この論文を読み、「坂田先生は十分神学者、宗教学者、旧約学者としてやっていける方であると思った。」と評価している。(24・32)

坂田記念館所蔵

・ 292×203 (mm)



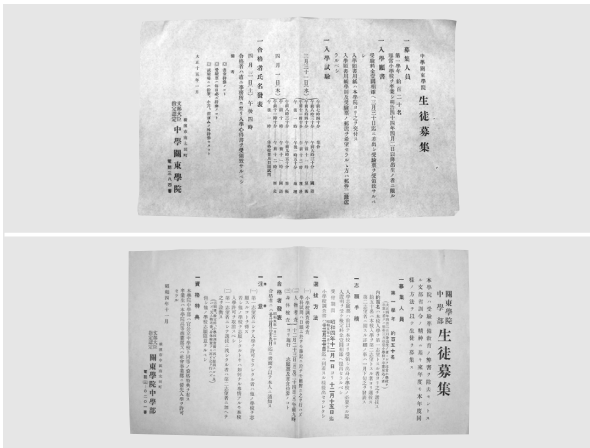
第一高等学校基督教青年会3年生送別記念写真

坂田祐は東京学院中等科を卒業し、1909（明治42）年9月、31歳で第一高等学校に入学した。

「わたしの生涯に於て、わたしにとって最も重大なことは、わたしが一高在学中に、内村鑑三先生の弟子となったことである。」と著書『恩寵の生涯』にあるとおり、坂田は内村鑑三の聖書研究会に加わった。

坂田（前列右から5人目）は一高基督教青年会に参加し、内村門下の白雨会の石田三治（2列左端）、松本実三（2列右から3人目）、鈴木禎二（前列右から4人目）、柏会の矢内原忠雄（前列右端）、金沢常雄（前列左から2人目）、三谷隆信（3列右から5人目）などと信仰の交わりを深めた。（31・33）

・240×298（mm）



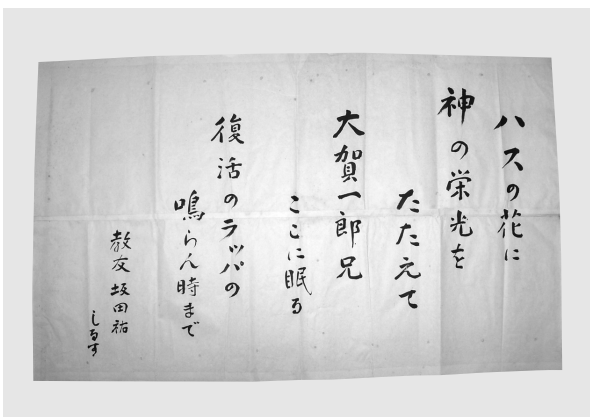
「中学関東学院」と「関東学院中学部」募集要項

1899（明治32）年に文部省が公布した「訓令12号」によって、学校で宗教教育をすることを禁止された。

各種学校であれば宗教教育を行うことができたが、各種学校には上級学校の受験資格と在学中の徴兵延期という特典が与えられなかった。

関東学院はキリスト教主義に基いて教育することを明確にし、校名を「関東学院中学校」にしないで「中学関東学院」として発足した。しかし、1922（大正11）年には中学校と同等の資格特典を与えられた。（20・34）

・中学関東学院…188×303（mm）、関東学院中学部…195×362（mm）



大賀一郎墓誌

多磨墓地にある大賀一郎の墓の坂田祐書による墓誌。

大賀一郎はハスの研究に生涯を捧げ「ハス博士」として知られ、1951（昭和26）年に2千年前の古ハスの種子の発芽に成功し、その翌年をはじめて開花させ、そのハスは「大賀ハス」といわれるようになった。本学院の六浦キャンパスのオープンチャペルにも美しい花を咲かせる「大賀ハス」がある。

坂田祐と大賀一郎は内村鑑三の聖書研究会の門下生として50年以上の交友関係にあり、大賀は1950年に関東学院大学教授に就任、生物学を教えた。坂田は大学での講義を終えた大賀を自宅にしばしば招いて、夕食を共にした。（6・35）坂田記念館所蔵

・520×860（mm）



内村鑑三からの書簡 1922 (大正11) 年 1 月 1 日

内村鑑三は、新年の所感として「キリスト奉仕を實行いたし度く存じ候」と記している。
坂田祐は1911 (明治44) 年10月から内村鑑三の門下に入り、それ以来20余年師事した。内村鑑三の坂田祐に対する信頼は厚く、1917 (大正6) 年の夏、御殿場で開催した柏木集会の家庭団樂会の事務長を命じたり、1918年9月に内村鑑三が再臨待望運動を開始したときには、教友会・柏会・白雨会を統合し柏木兄弟団とし、その団長に任命した。内村鑑三からの書簡は他にもある。(6・31)
坂田記念館所蔵

・書…188×472 (mm)、封筒…201×79 (mm)

●関連年表

- 1871年 チャールズ・バックリー・テンネー、アメリカ合衆国ニューヨーク州ヒルトンで生まれる (9・10)。
- 1878年 坂田祐、秋田県鹿角郡大湯村で生まれる (2・12)。
- 1901年 坂田祐、陸軍騎兵学校を首席で卒業 (10・28)。
- 1900年 テンネー、アメリカ・バプテスト派宣教師として来日 (5・)。
- 1903年 坂田祐、バプテスマを受け、四谷バプテスト教会の会員となる。
- 1905年 テンネー、休暇でアメリカに帰国した際、グレース・ウエップと結婚。京都で伝道活動に従事。
- 1908年 テンネー、横浜バプテスト神学校教授に就任。「ギリシャ語」と「新約聖書釈義」担当。
- 1909年 坂田祐、東京学院中学校卒業。第一高等学校入学 (9・)。
- 1910年 テンネー、愛妻グレースが出産時に逝去。愛児ボールも喪う。二人は横浜山手外国人墓地に眠る (9・)。
- 1911年 坂田祐、内村鑑三の門下に入る (10・)。内村鑑三の勧めで南原繁等7名と白雨会を結成 (12・)。
- 1912年 坂田祐、東京帝国大学文科大学に入学、哲学科宗教学を専攻。
- 1913年 テンネー、東京学院理事長に就任 (3・27)、日本バプテスト神学校校長に就任 (12・8)。
- 1914年 テンネー、ベティー宣教師の令嬢エリザベスと結婚、日本バプテスト神学校校長辞任。
- 1915年 坂田祐、東京帝国大学を卒業。東京学院の教師となる (7・)。
- 1916年 テンネー、日本バプテスト神学校校長に再び就任。
- 1917年 テンネーと坂田祐が神奈川県知事有吉忠一の案内で兵隊山 (現三春台校地) を視察し、払い下げの内諾を得る (1・27)。
東京学院中等部を拡張発展させる目的で廃止 (3・31)。

- 横浜山手のフィッシャー宅で、横浜に設立される中学校の理事会が開かれ、テンネーが理事長に選ばれる (11・23)。
- 1919年 私立中学関東学院の設立が認可され、設立者・理事長テンネー、学院長坂田祐とすることを認可された。
設立披露を横浜開港記念館で行う (1・27)。
中学関東学院第1回入学式挙行 (1年生146名入学)。
- 1920年 鉄筋コンクリート2階建ての本館校舎竣工 (3・31)。
- 1923年 関東大震災により、全施設を失った。職員3名死亡 (9・1)。
捜真女学校を借りて午後授業を行う (10・15)。
- 1924年 仮校舎落成し、捜真女学校から離れた (2・29)。
関東学院英語学校 (夜間) 設立 (4・1)。
テンネー、坂田祐を伴い学院復興資金募金のために帰国する (5・13)。
- 1927年 財団法人関東学院が組織され、東京学院が合併して、その組織に入り、関東学院高等学部、神学部になる (4・1)。
中学関東学院も財団法人の組織の中に入り、中学部と改称される (6・13)。
テンネーは学院長兼神学部長、坂田祐は高等学部長兼中学部長に就任。
- 1930年 テンネー、病氣療養のため帰国。名誉院長に任ぜられる (10・28)。
- 1936年 テンネー、逝去 (1・11)。学院で追悼会を行う (1・27)。
テンネー夫人エリザベス逝去 (5・13)。
二人ともヒルトンのパーマ・ユニオン墓地に眠る。
- 1937年 坂田祐、学院長に就任 (4・1)。
- 1939年 テンネー記念大講堂落成し、献堂式を挙げる (3・3)。

.....
参考資料一覧

1. 『アルバート・アーノルド・ベンネット その生涯と人物 —関東学院大学建学者の小伝—』
ベンネット夫人編著 多田貞三訳 関東学院大学 (1985年10月6日)
2. 『A. A. ベンネット研究 ある異質な指導者像』高野進 ヨルダン社 (1995年3月20日)
3. 『私の歩いてきた道』高谷道男 (1988年1月27日)
4. 『関東学院学報』第10~14号、第17号、第20~24号、第30号 関東学院
5. 『関東学院百年史』関東学院 (1984年10月6日)
6. 『日本キリスト教歴史大事典』教文館 (1988年2月20日)
7. 『いんまぬえる』第6号 関東学院 (1975年11月1日)
8. 『日本バプテスト史略上』高橋橋雄 東京三崎会館 (1923年5月24日)
9. 『英学と宣教の諸相』小林功芳 有隣堂 (2000年8月10日)
10. 『キリスト教人名辞典』日本基督教団出版局 (1986年2月15日)
11. 『宣教』第2号 日本バプテスト同盟宣教師研修所 (1978年12月)
12. 『日本につくした宣教師たち』大島良雄 ヨルダン社 (1997年11月30日)
13. 『灯火をかかげて』大島良雄 ヨルダン社 (2002年2月15日)
14. 『紀要』第85号 関東学院大学人文学会 (1999年3月25日) (『ヘンリー・タッピング小伝』大島良雄)
15. 『Japan Baptist』第167号 日本バプテスト同盟 (2006年2月1日) (『日本バプテスト発祥之地』について) 川島二郎)
16. 『関東学院100年』関東学院 (1984年10月6日)
17. 『日本バプテスト連盟史』日本バプテスト連盟 (1959年9月)
18. 日本バプテスト神学校第4回卒業式執行順序 (式次第) (1914年6月3日)

19. 『日本語聖書翻訳史』門脇清、大柴恒 新教出版社 (1983年11月10日)
20. 『この丘に立って (関東学院中学校高等学校80年史)』関東学院中学校高等学校 (1999年11月6日)
21. 『関東学院セツルメント』 関東学院 (昭和初期頃)
22. 『高等部たより』第10号、第13号、第20号 関東学院大学薬業会高等部会
23. 『自然・人間・社会』第22号 関東学院大学経済学部教養学会 (1997年1月30日)
24. 『坂田祐と関東学院』関東学院 (1973年12月16日)
25. 『横浜近代史辞典』湘南堂書店 (1986年1月)
26. 『INTERNATIONAL COÖPERATION AT THE GATEWAY OF THE ORIENT』 (1921年6月)
27. 『関東学院創立滿廿年紀念』関東学院 (1939年11月15日)
28. 『半ばはゼロ』大下繁喜 (1984年12月25日)
29. 経理委員会記録 第貳号 関東学院 自昭和九年三月 至昭和十一年十二月
30. 経理委員会記録 第參号 関東学院 自昭和十二年一月
31. 『新編 恩寵の生涯』坂田祐 (1976年8月10日)
32. 『キリスト教と文化』第2号 関東学院大学キリスト教と文化研究所 (2004年3月)
33. 『矢内原忠雄 伝』矢内原伊作 (1998年7月23日)
34. 『関東学院史資料』第6集 関東学院史編集委員会編 (1979年10月)
35. 『蓮ハ平和の象徴也 —大賀一郎博士を偲ぶ—』大賀一郎博士追憶文拾行会 (1967年5月25日)

<はじめに>

私は父三郎母トミの長男として父の実家である山形県尾花沢の疎開先で1946（昭和21）年3月25日に誕生した。実家は横浜市西区西前町にあったが1945（昭和20）年5月29日の横浜大空襲で焼けだされたので2年間の疎開暮らしのあと、母の実家の近くの横須賀市馬堀海岸に仮宅住まいをし、1948（昭和23）年8月11日に長女ひさみが誕生し、以後2人して関東学院に通うことになった。

父は神奈川県職員の時召集され1942（昭和17）年ニューギニアで負傷し、横須賀基地に搬送された。その後、東京都目黒区の海軍病院で4ヶ月の闘病生活を送り、伊豆下田の海軍委託療養所伊古奈旅館でさらに1年1ヶ月の温泉治療をした。その結果、奇跡的に県職員として復帰できた傷痍軍人である。戦争時に毎日横浜から目黒へ、また、朝5時に出発し列車と木炭バスを乗り継ぎ夕方5時にたどり着く2ヶ月に1回の横浜からの下田行きは困難を極め、精神的、肉体的に自暴自棄になった父を支えた母の偉大さを感じる。（1968（昭和43）年、私の初任給で伊古奈への3泊4日の旅を両親にプレゼントした。当時療養生活を支えてくれた方がいらっしやり、感謝と旧交を温めたことは今でも食卓の話題になる。）



父とともに 1949(昭和24)年

<幼稚園に>

戦争の傷跡から徐々に回復を遂げようとしている1949（昭和24）年4月、関東学院教会幼稚園に入園した。今では考えられないが木製の床の京浜急行線馬堀海岸から追浜まで乗車し、雷神社の並びの飲み屋さん前を通り、そよ風食堂の脇道から現在の南共済病院沿いに3棟あった青雲寮のうち、和田山寄りの1棟の1階園舎に3年間通園した。（最後の1年間は船越に引越したので田浦からの通園になった。）

当時は幼稚園が少なく、ましてや電車での通園なので子ども心に色々な方に声をかけられた思い出がある。中でも定期券で幼稚園に通うので馬堀海岸・追浜・田浦の駅員達と親しくなり、電車について色々質問し、品川までの駅を言えるようになった。また、切符切りの鉄の心地よいリズムが頭から離れず、お願いして帰宅時に駅で切符切りをさせてもらうなどして通園を楽しんだ。母は近所の人から帰宅が遅い原因を知らされ、駅に挨拶に行っていたと後日聞いた。「今日は僕が駅員さんか！」と声をかけてくださった乗降客の皆さんや駅長、関係者の方々の寛大なお心に感謝しています。

通園は毎日が遠足で楽しいし、いたずら坊主の私は園生活にすぐに慣れ、広い原っぱでトンボや蝶やバッタを追い掛け回し、学内に多数あった防火用水でヤゴやオタマジャクシを捕まえていた。園生活は礼拝から始まり主の祈りをとこな中居先生の難しい話をじっと聞かなければならないので大変だったが、先生方の優しく献身的な愛情に支えられ充実した3年間だった。

ただし元気なあまり、当時珍しかった自動車と競争し、自動車に轢かれて新聞記事になり、親に心配をかけ近所の方々にご迷惑をかけたことは赤面のいたりである。

当時のクラス名や担任の先生の名前もあやふやで心もとないが、ただ青雲寮の1階だったので2階の大学生が試験の時は騒ぐと注意された思い出が残る。隣の棟が小学校校舎だったので大学生にとってはよけい煩かったのかもしれない。

園生活が進むにつれ、怖い存在だった中居先生が部厚い眼鏡越しに優しいまなざしで園児に対応してくれるのが分かり、中居先生が牧師をしていた関東学院教会の日曜学校にも通うようになった。日曜学校は参加する方の年齢が幅広いので貴重な体験、経験を持つ大人の話に興味を覚え、感化されていたように思う。

戦争体験をした両親がなぜキリスト教の関東学院教会幼稚園を選んだのか大変興味深く思うと共に、キリスト教教育を園児の時から学べたことに感謝している。



妹ひさみとともに 1952(昭和27)年

森 孝久（もり・たかひさ）

1949（昭和24）年4月	関東学院教会幼稚園（現・六浦幼稚園）入園
1952（昭和27）年4月	関東学院小学校（現・六浦小学校）入学
1958（昭和33）年4月	関東学院六浦中学校・高等学校入学
1964（昭和39）年4月	関東学院大学経済学部入学
1986（昭和61）年4月	関東学院六浦中学校・高等学校事務長
2002（平成14）年4月	関東学院大学生涯学習センター課長
2008（平成20）年3月	関東学院を退職

学院史資料の紹介

高野 進 著『近代バプテスト派研究』ヨルダン社 1989年3月、

『A・A・ベンネット研究 ある異質な指導者像』ヨルダン社 1995年3月

高野先生は1960年に関東学院大学神学部に入學、1966年関東学院大学院神学研究科修士課程を修了し、アメリカのイェール大学神学大学院に学んだのち、1971年に関東学院中学校高等学校の教諭として就任され、1986年に経済学部助教授、1991年教授に昇格し、2008年3月特約教授を退任するまで関東学院の教育に関わってこられた。この間、中学校高等学校宗教主任、大学宗教主事、小学校校長、学院宗教主任を歴任され、また、職員会の聖書研究会を指導してこられた。

関東学院はバプテスト派の宣教師たちによって設立された学院であり、この2冊の著作を通して、広くバプテスト派の世界宣教の中から学院の歴史の流れを学ぶことができる。

『近代バプテスト派研究』

この著書は、第一部バプテスト派の歴史と思想、第二部バプテスト派と現代、第三部バプテストの人々からなる。

バプテスト派は聖書研究によって「発見したもの」の「即実践」の運動であり、初期バプテストは1. 信仰による救い。2. 聖書を信仰と生活の基準とする。3. 権威主義的中央集権的な教会に反対で各個教会の霊的自律・自治を重んじた。このためイギリス国教会から迫害を受けた。迫害のなかで聖書の真理を第一とし、権威主義的なものに抵抗し続けた自覚的なキリスト者の群れである。

19世紀になって、プロテスタントの海外宣教がなされたが、その出発点となったのがイギリス・バプテスト派の近代宣教運動の父といわれたウィリアム・ケアリーであった。ケアリーは40年間インドにおける宣教のためにすべてを捧げた。このケアリーの宣教に対する強い信仰に動かされアドナイラム・ジャドソンが宣教師としてビルマに赴いた。ジャドソンの訴えの手紙を読んでネイサン・ブラウンもビルマ、インドのアッサムに宣教した。ブラウンは健康を害しアメリカへ帰国し、奴隷解放のため活動した後、65歳で来日、日本における第2番目のプロテスタント教会を建設し、日本語による最初の新約聖書全訳を成し遂げた。その宣教の情熱を、ベンネットが引き継ぎ、その流れの中で関東学院が生まれた。

バプテストの宣教師たちはキリストの愛を異国の人に伝えるために海外に赴き、本国人の無理解と現地での苦難のなかで、言語を習得し、文法書を作り、聖書を翻訳し、教育事業を行い、宣教の基礎を確立した宣教のパイオニアであった。

現在、125年記念事業として、出版を準備している高野先生の著作『関東学院の源流を探る』に関東学院に関係した多くのバプテストの宣教師が紹介されている。これらの宣教師たちの愛の労苦によって関東学院の今日があることを教えられる。



『A・A・ベンネット研究—ある異質な指導者像—』

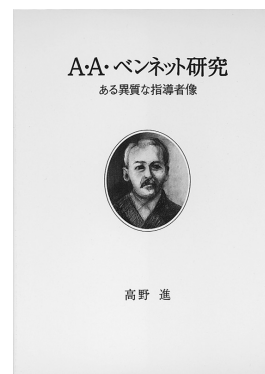
この著書は、I. A・A・ベンネットの生涯、II. A・A・ベンネットの著作、III. 付論からなっており、ベンネットに関する初めての本格的な研究である。

ベンネットは本学院の源流である横浜バプテスト神学校を設立し、初代校長・教授として約30年間、伝道と教育活動を行った。また、ベンネットは宣教師、牧師、聖書学者、説教者、讃美歌作家と多彩な活動をした。それらの業績はどれひとつ取っても一流の業績を残したという。著者はその業績を一つ一つ検証しており、ベンネットの多彩な活動を知ることができる。

しかし、そのような業績と共に彼の素晴らしさはその生き方である。

当時、宣教師の中には先進国から来たという優越的な意識が強く、現地の人を見下して反感を持った人もいたという。ところが、ベンネットは日本人から、慕われ、敬愛され、讃美歌213にも歌われた。それは、著者が副題に「異質な指導者像」とつけているように、「日本の指導者達は一般庶民に対峙し、異なる存在として自己の権力、権威、優越を保持してきた。これこそ崇拜を得る道と考えられてきた。結局、神聖化、神格化が主張されてきた。ところがベンネットの場合、彼はしもべとして仕える生き方に徹した。」「人々は彼の中にしもべとしてのキリストーキリスト教的指導者像を見たのであり彼の墓碑銘“He lived to serve.”はこのような彼の生涯を一言で要約したものと言える。」と謙虚で他者のために奉仕を続けたベンネットの生涯が明らかにされている。

ベンネットは校訓である「人になれ 奉仕せよ」を文字通り実践した生涯であった。



(学院史資料室 三浦啓治)

ハスの花に

関東学院大学名誉教授 高野 進

これは東京府中の多磨霊園内にある大賀一郎博士の墓碑に刻まれた坂田祐先生のお言葉である。「八十八翁」とあるので、1966年に筆を執られたのであろう。先生はその一年前に学院長を退かれていた。1966年は関東学院にとって記念すべき年であった。その年の五月に関東学院開学80周年記念式典が行われた。大賀一郎博士と坂田祐先生との関係は「教友」と言い表している。これはお二人とも内村鑑三氏の弟子であったので、「キリスト教信仰の友」という意味である。ちなみに二人の敬愛する内村鑑三氏の墓も多磨霊園内にある。

富田富士雄編『関東学院大学生生活』（現代思潮社、1954年）には、大賀一郎博士について次のような記述がある。

「生物学の大賀一郎教授は、蓮の実の研究で、内外に知られ、最近、『ライフ』誌にもものった先生である。坂田学長（1954年当時、大学設立五年目－注）と同じく内村鑑三門下である。最近は古代瓦における布目の研究で、学会の問題となり、また宮内庁から正倉院御物の材質調査委員を委嘱された。しばしば古い布や蓮の実を持って来て学生に見せている。」

関東学院大学は1949年に開設された。大賀博士は大学開設にあたって大切な教授陣のお一人であった。博士は熱情と愛情をもって古代の蓮の種子を今日によみがえらせ、花を咲かせた。（それについては掲載した囲み記事を見て欲しい。）坂田祐先生は大賀博士の研究者・キリスト教信仰者のあり方を高く評価して、ここに碑文を残したのである。坂田祐先生は大賀一郎先生の存在を二方向から見る。一つは博士がこれまでなしてきた業績から、もう一つは博士の将来からである。

前半「ハスの花に／神の栄光を／たたえている／大賀一郎兄」。古代の小さな蓮の種子の中にも神から付与された生命が隠されている。博士は長い間眠っていたその種子に芽を出させ、花を咲かせた。そこに神の栄光をみる。

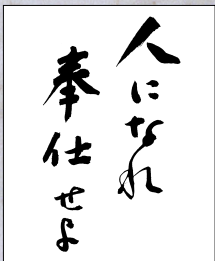
後半「大賀一郎兄／ここに眠る／復活のラッパの鳴る時

で」。古代のハスの種子のように大賀博士もしばらくはこの墓に眠られるが、「復活のラッパが鳴る時」（Iテサロニケ4：13-18）、栄光に与ることができるという二人の復活信仰の希望が告白されている。

教育は種まきとその種を育てる仕事である。子供たちという小さな種の中に神から付与された尊い生命を見て、その成長を信じて愛情と情熱を注ぐのである。「私は植え、アポロは水をそそいだ。しかし成長させて下さるのは、神である。」（Iコリント3：6）パウロもアポロも神の働きに与らせていただいている奉仕者である。私たちも、若者たちの中に「いのち」と大きな可能性を見出し、それを成長させるために喜びをもって仕えねばならない。それが坂田祐先生と大賀博士が生涯をかけてなされたことであった。そして私たちもその歩まれた跡をたどりたものである。



1964（昭和39）年5月24日付 毎日新聞より
（毎日新聞社の許可を得て転載しています）



関東学院 校訓

編集後記

◆今回の展示は、第4回で横浜バプテスト神学校と東京学院、第5回で中学関東学院と財団法人関東学院を取り上げ、3つの源流から本流である財団法人関東学院の成立までの歴史を振り返って来た。改めて、多くの学院関係者の篤い祈りと奉仕によって、学院の今日があることを認識させられた。◇本学の幼稚園から大学、そして職員であった森孝久氏から幼稚園時代の思い出の記事をいただき、当時の幼稚園の状況が生き生きと描かれ、特に、先生方の愛情ある指導の様子をうかがい知ることができた。（三浦）◆本誌で連載執筆されている高野進先生は2008年3月に定年を迎え、同年本大学名誉教授となられました。先生は、関東学院で教鞭を取るとともに学院史の様々な記録を残されています。◇長年関東学院で過ごされた森孝久氏から手記と多数の写真的提供がありました。今後も関東学院の多くの先輩方の手記を残していければと思います。（菊池）

資料・情報提供のお願い

学院史資料室は学院に関する資料の収集をしています。各学校、各部署等で発行されました刊行物は一部、学院史資料室にご寄贈くださいますようお願いいたします。また、各所で作成されたのち、既に保存期間を超えたか、不要になっている過去の書類、機器・備品、写真などにつきましても、情報を提供していただけますようご協力をお願いいたします。

KANTO GAKUIN Archives

関東学院学院史資料室 ニュース・レター 第12号

発行日 2009(平成21)年2月27日

発行人 関東学院 学院長 森島牧人

編集 関東学院 学院史資料室

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1

TEL. 045-786-7066 FAX. 045-786-2932